

2013 推・帰・社

受 験 番 号	
------------	--

## 医学部保健学科

### 小論文Ⅱ問題

#### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この冊子のページ数は5ページです。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等があった場合は申し出てください。
3. 問題冊子の余白は下書きに使用してもかまいません。
4. 解答は所定の答案用紙に記入してください。
5. 答案用紙は持ち帰らないでください。
6. 問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

1 次の文章を読んで、問1～3に答えなさい。

ヘルシーエイジング **healthy aging** という言葉が国の内外で目につくようになってきています。ヘルシーエイジングには、日本語訳はなく、カタカナでそのまま表現されているのが現状といえます。ここでは、アンチエイジングとヘルシーエイジングについて少し考えてみます。

日常会話の中で、“年は取りたくないものだ”、“死にたくはない”というようなことができます。若いうちは、気にもしていなかったこれらの話題が、我々の年齢になると、同年齢の間では、結構共通の話題となったりします。しかし、本当に意図するところが、単に暦年齢のことではなく、属する集団社会・生活史・現在の生活状況・宗教的背景などによって微妙に異なっていることにも気がつくことがあります。

私は、最近、アンチエイジングは、キリスト教的精神に基づくものと考えています。キリスト教では、神との契約によって人間だけが選ばれたという選民意識が濃厚です。そして、過酷な砂漠の自然環境の中での生活に根ざした天地創造から世紀末までの直線的思考が優位であるとされます。選民意識から、すべてのものは、宇宙までも征服の対象となります。老化という自然現象も、当然のこととして、征服すべき対象とされます。Anti・(対抗する)の対象とされるのです。それが、米国で生まれたアンチエイジングの意味であると考えられます。アンチエイジングの言葉の中には、米国の資料には、不死までも対象とされていることがしばしばあります。とはいいいながら、高校生の時代に、“**Man is mortal** 人は死すべき”という古語のあることも知りました。

一般には、東洋思想と大きな括弧でくくられる古代中国に始まる道教にある不老不死の考えは有名です。秦の始皇帝は、不老不死を実現するため仙人を連れて来ることを求めて、徐福を東方にある蓬萊（日本と考えられている）に遣わしたのでした。栄華の果ての、征服思想の発露でしょうか。ちなみに、仙人の英語は **immortals**（死なない人）です。

世界的にみれば、日本は夏には南からの台風、冬には西高東低の気圧配置によって北のシベリアから来る寒風が結果的に水となる雨や雪をもたらし、緑の森の豊かな、優しい自然に囲まれた恵まれた地勢的環境にありました。その生活に根ざした円環的思考が、特徴とされます。自然とは、互生・共存すべきものでした。現代の日本人でも、あるがままに、自然（じねん）という表現を愛し、理解する人が多くいると考えます。私には、深沢七郎作の小説、楢山節考にあるような姥捨て山伝説は、日本人に受け入れられている思想と考えられるのです。伝説は、単なる物語ではなく、民衆の普遍的意思の結集と考えられる場合があるといわれます。生物学的に考えると、あらゆる意味で傷んで弱くなった個体が死ぬことは、種の保存・維持のために意義あることです。

基本命題であるアンチエイジングは、極端な状況で、少子高齢化社会において歓迎されるのでしょうか。もしも、すべての人に達成されたら、人間社会は立ちゆかないこととなります。イギリスの作家ジェームス・ヒルトン **James Hilton** が 1933 年に出版した小説「**Lost Horizon**」に書かれているシャングリラは桃源郷ではあっても、理想郷ではないとも考えられます。死に悩み、生きて煩惱に苦しんでこそ人生というものとも考えます。

ヘルシーエイジングこそ、日本人的心情における究極目標ではないでしょうか。そこでは、死ぬこと、すなわち死の受容が前提になっています。しかし、PPK（ピンピンコロリ）が目標です。誰にも迷惑をかけないで、朝寝床の中で死んでいるのが見つかる……準備として、常日頃「お世話になっているね、有難う、愛しているよ」を、前もって言うておくこと。それによって、不思議に心の安寧が得られます。念仏と同じ、繰り返していると、次第に、その気になってくると多くの人がいます。

（出典：阿岸鉄三，科学的医療と非科学的医療の競合—統合医療の本質—，p.187—189，金原出版，2009，一部改変）

問1 「アンチエイジング」について筆者の考えを，150字以内にまとめ，解答欄  -1に記しなさい。

問2 「ヘルシーエイジング」について筆者の考えを，150字以内にまとめ，解答欄  -2に記しなさい。

問3 あなたが考える「エイジング（老化）」について，150字以内にまとめ，解答欄  -3に記しなさい。

2 次の文章を読んで、問1に答えなさい。

日本の教育状況について、江戸後期から幕末に来日した外国人たちは驚き、さまざまな記録を残している。

文化8年(1811)、ロシア海軍少佐ヴァシリー・ミハイロヴィチ・ゴローニン(1776～1831)は、<sup>くわしりとう</sup>国後島測量中に幕府役人に捕えられ、回船業者でロシアの捕虜となった高田屋嘉兵衛と同10年に交換・釈放された。ゴローニンは、著書『日本<sup>にほん</sup><sup>ゆう</sup>囚記』において、「日本の国民教育については、全体として一国民を他国民と比較すれば、日本人は天下を通じて最も教育の進んだ国民である。日本には読み書きできない人間や、祖国の法律を知らない人間は一人もみない」「だから国民全体を採るならば、日本人はヨーロッパの下層階級よりも物事に関しすぐれた理解を持つてゐるのである」と、日本の国民教育が世界的レベルにあること、日本国民がヨーロッパの下層民よりも理解力に勝っていることを述べている。

文政3年(1820)から同12年までの長崎・出島のオランダ商館員として勤務し、この間同5年に商館長ブロンホフ(1779～1853)の江戸参府に随行したオランダ人のファン・オーフルメル・フィッセル(1800～1848)は、日本での見聞や体験をもとに『日本<sup>にほん</sup>風俗備考』を著し、その中で日本の教育について次のように記している。

(a)日本人は、勉学に熱心であつて疲れを知らない。彼らがオランダ人や中国人のもとで修業するために、日本国内のほかの地方から長崎に留学することもまれなことではない。なかでも近年、これまで以上に数多く長崎に姿を見せ、またその才能と進歩の著しい証拠を示したものは、多くの医師たちである。

(b)たしかに日本には、われわれの大学に匹敵するような、比較的高等な科学の知識に到達するための施設はない。それにもかかわらず、科学が退歩しないように守り維持するために、彼らの学問業績を伝えていくところの、将軍の豊富な収集品の管理者として江戸で任命される<sup>ぎんがく</sup>碩学<sup>せいがく</sup>たちの学会・協会の中には、ヨーロッパの大学とある程度匹敵するものがあるのである。各藩内においてもこのことは規模こそ小さいが同じ形で存在していて、好学の士にとって、その勉学を続けていく機会を欠くことはまれである。

(c)日本人は、ふつう子どもたちを学校へやるか、または子どもたちに家庭で習字や語学の教師をつけて勉強させるのであるが、そのほかは息子の教育の面倒は大部分父親が見ており、娘の教育の面倒は母親が見ている。

(d)私には日本人ほど好んでペンや筆を振るう国民があるとは信じられない。彼らはあらゆることを文書にして取り扱う。また一般的にきわめて広い範囲にわたって手紙のやりとりを続けているので、婦人ばかりか男子も、このために時間の大半を費やしている有様である。彼らは手紙を書くのに、巻紙にして売られている貼り合わされた薄紙を使用している。そして一通の手紙が5エル(5行のことか?)またはそれ以上の長さ<sup>よつろく</sup>に及ぶ例を見ることもまれではない。彼らは<sup>ふうせん</sup>封筒<sup>ふうせん</sup>も<sup>ふうせん</sup>封緘紙<sup>ふうせん</sup>も知らないが、封筒を一粒の飯粒かまたはわずかな糊でしっかりと閉じ、さらに筆

を持ってその上に文字を書き、あるいはまた自分たちの印章か封印を用いることもよくある。

文政6年(1823)から同11年まで出島のオランダ商館付きの医官として来日し、6年間滞在したドイツ人の博物学者フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは、日本地図の海外持ち出しなどが発覚し国外退去となったが、安政5年(1858)の日蘭通商条約成立の翌年に再来日し、文久2年(1862)まで滞在した。再来日のさいに同行した長男のアレクサンダー・フォン・シーボルト(1846~1911)は、著書『シーボルト最後の日本旅行』において、幕末期の日本の教育について、次のように述べている。

日本語の授業のほか、私は正規の漢字を習った。当時、日本の子どもに文字を教えた方法をそのまま私にもやらせようとした。私は最初にいわゆる部首を覚えねばならなかった。日本語の文字は約3万あるといわれているが、すべての文字はこの部首をもとにして構成されているからである。その教授法は極めて単純である。すなわち太い筆と墨を使い、綴った紙に何回も何回も同じ文字を上重ねて書くので、しまいには黒いインクの大きなシミのようにならなくなる。さらにその上に書き続けると、ついには墨は次第に吸取り紙にしみ込んでゆくように紙に浸み込み、習字帳は黒い固まりになってしまう。これを後で日に乾かし、そして何度も書く、あるいはもっと正確に言えば、塗りつぶすのである。およそ百回も同じ字を書くと、ついに生徒ははっきりと覚えてしまい、清書してもよいことになる。先生は清書を朱墨で治す。石盤はまったく使わない。この単純な書き方の教授では、たくさんの線や形からできている文字を覚えさせるために、強いて機械的な方法を生徒に課しているのである。日本人がある文字の書き方を忘れてしまったとき、彼がどんな風にするかを観察するのは、特筆に値する。日本人は長いこと考え込まず、人差し指を無造作になんの上にも書くというわけでもなく動かしているが、普通は数回やっているうちに、複雑な字画の文字を思い出すのである。

テキストはふつう古典の書物であるが、クラス全体が同時に先生と一緒に大きな声を出して読む。もっと正確に言えば、合唱するのである。

長い文章を講義するときには、最初はただ読み方だけを暗唱し、意味は問題にしない。後日上級に進んでから、やっと文字の意義や本文の意味を説明するのである。

日本人の子弟がどんなに<sup>しつけ</sup>躾がよく行儀がよいかは、とうてい思いにも及ばない。ヨーロッパで行われているような学校の罰則はまったく聞いたことがない。私たちの国で見られるように、教師から体罰を受けた日本の生徒は、十中八九それを恥辱と考え、家から勘当され、同級生の目には、つまはじきされたものに見えるだろう。また子弟の教育のさいに、少なくとも教養のある階層では、体罰は行われない。私たちの国でよくやる鞭打ちを私は一度も見たことがなかった。

以上、シーボルトは、反復練習により文字を習得すること、皆で音読して文章を覚えること、体罰を行わないことなどを、日本の教育の特徴ととらえたのである。

注1) 碩学<sup>せきがく</sup>：修めた学問が広く深いこと。また、その人。

注2) 封蝋<sup>ふうろう</sup>：書状やびんの栓を封じるのに使う、ろう状の物質。

注3) 封緘紙<sup>ふうかんし</sup>：封書・文書・包装などの封じ目に貼って封をするための紙片。シール。

(出典：大石学, 江戸の教育力 近代日本の知的基盤, p.104—109, 東京学芸大学出版会, 2010, 一部改変)

問 1 江戸後期から幕末に来日した外国人たちが日本の教育状況について書いた内容を、要約して200字以内にまとめ、解答欄 

2
---

 - 1 に記しなさい。